

かゝる趣なるは淺まし。

〔鉢かづき物語<sub>下</sub>〕は、うへ仰けるやうは、さもあれはちかづきはへむげの者にて、わか君をうしなはんとおもふやらむ、いかせんれんせいと仰ける、れんせい申されるは、かの君はさならぬことさへ、いろふかく物はちをし給て、おほろげごと迄もつ、ましげ成みたちにてわたらせ候へ共、此事におゐては、ちたまふけしきも候はず、さあらばきむだちのよめくらべをし給ひて御らん候へ、さやうに候は、かのちかづきはづかしく思ひて、いづくへも出行こと候はんと申されければ、實もと思召、いつくきんだちのよめくらべ有べしと、口々にふれさせける、さる程に、さいしやうどの、はちかづきがもとへ御入有て、あれ聞給へ、我々を追うしなはんために、よめくらべといふこと申いだしてふれ候へば、いかせんと涙をながし給ひければ、はちかづきもともになみだをながし申様、われゆへに君をいたづらになし申べきか、我々いづくへもゆかんと申ければ、さいしやうどの仰けるは、御身にはなれては、かた時もゐられ候まじ、いづかたへなり共、ともに出んどのたまへば、はちかづき何と思ひわけたる方もなく、涙をながし給ふ時けり。○中 略 ともやうく、あけがたに成ぬれば、急出んとて、涙と共に二人ながら出んとし給ふ時に、いたゞき給ふはち、かつはとまへに落にけり、さいしやうどの、おどろき給ひて、ひめぎみの御かほをつくぐ、とみたまへば、十五夜の月のくもまを出るにことならず、かみのか、りすがたかたち、何にたとへん方もなし。○中 是程いみじくわほうにてましますこと、のうれしさよ、今はいづくへもゆくべきにあらずとて、よめ合のざしきへ出んとこしらへ給ふ。

新造  
花嫁

〔日本書紀<sub>二十</sub>七〕三年十二月、是月淡海國言。○中 栗太郡人磐城村主般之新婦、床席頭端一宿之間、

稻生而穗、其且垂穎而熟、明日之夜、更生一穗、新婦出庭、兩箇鑰匙自天落前、婦取而與般、般得始富、

〔倭訓栞<sub>前編</sub>十一〕しんざう。○中 今士大夫の新婦を稱せり、深窓なるべし、源氏によそほひ深き